資料４_ヒアリング結果（施設別）

事業者 A 【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 4 日（水）】

基本情報（2026 年 1 月 1 日現在）

サービス種別	指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
所在地域	四国地方
従業員数・職員数	56 人（正規・非正規を含む常勤換算数。職種を問わず）
うち外国人職員数	19 人（特定活動 6 人、特定技能 13 人）
利用者定員数	100 人

1．外国人介護人材の受入れ状況、介護福祉士国家試験の受験及び合否の状況について

- 2009 年に EPA 介護福祉士候補者の受け入れを開始し、毎年 2 名程度、現在通算で 16 名の EPA 介護福祉士候補者を受け入れている。そのうち 4 名が介護福祉士国家試験に合格した。技能実習の受け入れは行っていない。
- 最初に受け入れた EPA 介護福祉士候補者は、介護福祉士国家試験に合格して現在も当施設のデイサービスで生活相談員をしている。
- 一昨年くらいから特定技能の職員が一気に増えた。特定技能の職員も今年 3 名受験し、現在結果待ちである。昨年度は 2 名受験した。
- EPA 介護福祉士候補者も特定技能の職員もインドネシアからのみ受け入れしている。今後もインドネシアに絞って受け入れをしていく予定。

2．外国人介護人材への国家試験のための学習支援の内容・体制・方針について

- 日本語の学習支援に関しては日本語能力試験、介護専門用語の支援も含めて外部講師にお願いしている。介護の技術的な支援は、各部署のリーダーや外国人の先輩職員が支援している。
- 職場に慣れてもらうため、また介護の勉強のためにも、日本語の学習支援は非常に重要であると考えている。
- 外国人介護人材の日本語のレベル（初級、中級、上級）に応じて、それぞれ月 90 分を 4 コマ程度ずつ、合計で月 10 コマ程度の授業を日本語講師にお願いしている（クラス分けは講師が実施）。
- 講師料は、補助金などを活用し、施設から支払っており、外国人介護人材からは徴収していない。使用する教材についても施設で購入している。勤務時間外の参加としているため、日本語学習の時間の給料は発生しない。
- 授業に参加しやすいように、1 か月前には授業の日時を決めた上で、職場のシフトを組むようにしている。また、まとまった人数で同じ講義を受けると業務に支障が生じるので、同じ講義を受講しても業務に支障が生じないように事業所の配置に偏りがないようにしている。
- 日本語の講義は、介護福祉士国家試験に合格した場合でも、更なる自己学習として受講することが可能。
- EPA 介護福祉士候補者の場合は日本の介護について国際厚生事業団の研修機会があるが、在留資格「特定技能」の場合は事前の教育が不十分なところもあるため、簡単な日本語のマニュアルを交えながら、食事介助や入浴介助の仕方を教育している。施設として誰にでも分かりやすいマニュアルの作成を心掛けている。
- WEB 等の翻訳機能を使用し、外国語のマニュアルを施設で作成し、働いているインドネシア人の職員に見てもらい、外国語訳が不適切な箇所は適宜直してもらっている。

- インドネシアの元 EPA 介護福祉士候補者の方々が所属する現地の学校が開催している試験対策講座やセミナーをオンラインで受講させている。
- 寮や社宅のインターネット環境は施設側で整備し（毎月の料金も施設負担）、自己学習や母国とのコミュニケーションを支援している。

３．支援内容の検討プロセスについて

- 2009 年当時、外国人介護人材を採用する必要性を感じてなかったものの、EPA 制度が開始されたため、試しに 1 名受け入れてみたところ、介護福祉士国家試験に合格した。その後の外国人介護人材に対する支援は、その職員と相談しながら進めてきた。
- 日本語に関しては、最初は職員が教えていたが、日常会話と介護の会話は異なるため、職員だけでの支援では困難な部分があった。そのため、2017 年頃から外部講師に依頼している。スタートとしては、たまたま常務理事の妹がインドネシアで日本語講師をしていたため、すぐにお願いすることができた。その後も、常務理事の妹が次の講師を紹介してくれるなど、現在も継続して日本語講師に協力いただいている。
- 理事長などの上層部も外国人介護人材の育成に理解があり、積極的に支援してくれている。

４．不合格者への支援について

- 昨年の不合格者 2 名に対しては、口頭で、引き続きがんばってもらいたいこと、頑張るなら施設もしっかりと支援していく旨などは伝達している。不合格になった人に対して、支援内容を変更することはしていない。
- EPA 介護福祉士候補者で介護福祉士国家試験に不合格となった場合でも、在留資格を特定技能に切替えたあとも本人の希望があれば引き続き受験を支援している。

５．国家試験を受験する外国人介護人材について

- 受験理由は、日本で仕事をしたいというのが最も多いと感じる。その他、給料が上がること、一緒に勉強を頑張れる仲間が周りにいることも理由になっていると思われる。
- 介護福祉士の資格手当は、8,000 円／月。日本人でも外国人でも同様。
- EPA 介護福祉士候補者は、母国の看護大学などを卒業している人が多く、ある程度基礎知識があり、勉強の進め方などは良く知っている。特定技能の職員の場合は、そうでない人も多いが、本人の自主性に任せている。やる気がある人は、勉強も自分でどんどん進めている。
- 介護福祉士国家資格を取得した外国人介護人材には、将来的には是非リーダーになってもらいたいと考えている。外国人介護人材の中からリーダーが出てくることで、他の外国人介護人材のモチベーション向上につながり、施設に残って働きたいという人も増えるのではないかと考えている。
- ただし、都会で働きたい人や母国に戻りたい人も当然にいると思うため、本人の意思は尊重するようにしている。施設を離れる場合は、人員を補充する必要があるため、日常のコミュニケーションの中で本人の意向を前広に確認していくようにしている。

６．学習支援における課題について

- 受け入れ開始当時に、もっと学習支援してあげればよかったとの反省はあるが、最近は人員配置に余裕が出てきたため、一定の支援はできてきていると思う。

- 最初に受け入れた EPA 介護福祉士候補者の職員が非常に優秀であったため、受け入れ側には特に大きな苦労はなかった。その職員は、コミュニケーション能力が高く、地域の自治会やお祭りなどにも積極的に参加したため、日本のコミュニティにすぐに溶け込むことができた。ただ、外国人自体が少ない地域の中で生活や仕事を始めることには、それなりの苦労があったのではないかと思う。
- 学習の中で難しいと感じている部分は、日本の介護の歴史的な内容と思われる。一方で、介護の技術的な内容は比較的すぐ理解できているようである。

７．その他、外国人介護人材の国家試験のための学習支援について

- 日本だと、日本語のテキストしか入手できない。Web 上にはいろいろあるが、まだまだ少ないと感じる。もっと外国語のテキストがあれば、勉強もはかどるのではないか。
- 業界団体などから外国人支援の案内などがきているが、テキストでの勉強の方がやりやすいと思われるため、講座のテキストがあるとよりよいと思われる。

外国人介護人材 A（事業者 A の施設に所属）　【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 4 日（水）】

1．介護福祉士国家試験のための学習に関することについて

- 基本的には日本語の「介護福祉士国試ナビ」など日本で買えるテキストを用いて学習している。わからないことは、インドネシア語で書いてある介護に関する本を自分で購入したので、そういったものを活用しながら学習している。
- ペースは、1 回あたり 1 ～ 3 時間を週 3 回程度。休日や少し早起きした時間に勉強している。特に計画的に実施しているわけではなく、その日の気分や仕事の疲れ具合でやるかやらないか決めている。
- 日本人が国家試験の問題解説などを投稿している YouTube や TikTok で勉強することもある。インドネシア人が解説する動画もあるが、日本人がインドネシア語で解説する動画が一番分かりやすい。
- 昨年、模擬試験を 2 回（2025 年 10 月、12 月）受験した。模擬試験は国際厚生事業団経由で申し込んだ。
- 元 EPA 介護福祉士候補者の仲間と一緒に勉強することもある。同じ法人ではない別の施設の人と、週 3 回程度（主に月・水・金）オンラインで勉強している。分からないところを教えてもらったり、国家試験の問題を出し合ったりしている。
- インドネシアでの勉強の仕方と日本の勉強の仕方は違う。インドネシアでは介護の具体的な勉強はあまりしなかったが、日本ではより具体的な内容について勉強できた。
- 日本語は、YouTube や Instagram を活用して自分でも勉強している。
- 漢字の勉強が一番難しい。職場の先輩や日本語の先生からのアドバイスを受けて、単語帳に書いて、仕事の合間や寝る前など頻繁に確認するようにしている。Google Translate を使いながら翻訳して、それをさらに日本語で調べて繰り返し勉強することもある。

2．受入法人・施設からの支援について

- 週 1 回 90 分を月に 4 回程度、日本語の先生の授業を受けている。
- 職場の人が仕事の合間に、国家試験の問題の分からないところを解説してくれるのが一番助かる。質問もしやすい。
- インドネシア人の先輩に聞いても分からないことがある場合は、日本人の先輩に聞く。日本人に聞く場合はゆっくり話してもらえるようにお願いしている。
- 教科書や本を買う際に施設の職員に手伝ってもらうことがある。

3．介護福祉士国家試験の受験に関することについて

- 受験理由は、日本にずっと住みたいため。同じ介護の仕事だとインドネシアの方が給料が安い。
- 昨年国家試験を受験した際は、合格の自信はなかった。今年の国家試験の手応えは、ギリギリというところ。7 割が合格ラインと思うが、7 割弱の出来であった。今年ダメであっても、勉強は継続し、来年には合格したいと思っている。合格するまでは受験をして遅くても 2 年後までには国家試験に合格したい。

４．目標としている日本語能力のレベルについて

- 現在Ｎ３であるが、来年にはＮ２をとりたいと思う。今は、N1 になる自信はない。
- 国家試験の問題が読みやすくなるように、また、日本人や利用者とスラスラ話せるようになるために日本語の勉強は続けたい。
- 利用者の方言を理解するのは難しいと感じるが、話していると面白いなと感じることがある。

５．今後の仕事への希望について

- 元々、インドネシアでは看護師資格を持っているのでインドネシアでは点滴などが実施できる。日本で仕事をしてみたら、実際はおむつの交換などであったことに当初戸惑いはあったが、慣れてくると面白いと感じるようになった。
- インドネシアの看護師資格は、バイタルサインを測る際などに役に立っている。
- 将来、介護福祉士国家試験に合格したら、１～２年以内で結婚し、家族を日本に呼び寄せ、リーダーになり、10～20 年程度は日本で働きたいと考えている。

事業者 B 【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 5 日（木）】

基本情報（2026 年 1 月 1 日時点）

サービス種別	認知症対応型共同生活介護
所在地域	近畿地方
従業員数・職員数	16 人（正規・非正規を含む常勤換算数。職種を問わず）
うち外国人職員数	8 人（介護 3 人、技能実習 5 人）
利用者定員数	18 人

1．外国人介護人材の受入れ状況、介護福祉士国家試験の受験及び合否の状況について

- 2017 年に、日本語学校に通う留学生を 2 名アルバイトとして受け入れ、食事の準備などをお願いしていた。この後、2019 年 11 月に技能実習生を 2 名受け入れた。1 名は 1 年後に帰国したが、その後も年 1～2 名程度、技能実習もしくは特定技能の人員の受け入れを継続している。
- 2023 年 1 月に初めて 1 名が国家試験を受験し、合格した。翌年 2024 年 1 月に 2 名受験し、2 名とも合格した。2025 年は、3 名受験したが全員不合格であった。今年は、2 名が受験し、結果待ちである。
- 受け入れは、全員ベトナム人である。特にベトナム人に拘っているわけではないが、受け入れ当時にベトナム人の留学生が多かったためそのようになった。

2．外国人介護人材への国家試験のための学習支援の内容・体制・方針について

- 法人グループの本部に、介護教育担当が 3 名、日本語教師が 4 名いる。本部で教育計画を立て、各施設へ下ろしている。法人グループ内の日本語学校の教員とも連携を図っている。
- 初任者研修や実務者研修も外国人を中心に実施している。外国人にとって分かりやすい内容であれば、当然に日本人にとっても分かりやすいと思われるためそうしている。
- 日本語、介護の専門性や専門用語の教育も実施している。
- リスキリングの助成金なども活用している。
- 海外の送り出し機関と連携し、入国前から日本文化やマナーの教育を実施している。
- 昨年 4 月に法人グループとしてベトナムにも法人を立ち上げた。
- 最初は、月 1 回のワークショップを中心とした教育を実施していたが、なかなかシフトが合わず、コロナの影響もあったため、現在は e ラーニングを中心とした教育システムを構築し教育を実施している。
- 受講生の 95%が介護福祉士の受験を希望している。ビザが切れる前に合格できるように、入国した時点で実習生全員に教育プログラムを説明している。
- 法人グループ内全体の傾向として、日本語能力が高い人の方が、試験の合格率が高い。
- 受け入れ当初は、周りが日本人ばかりであったため、日本語を勉強しやすい環境にあった。最近はベトナム人の先輩が増え、日本語を使用しなくてもよい環境が増えてきたため、日本語を勉強する機会が減っているように感じる。
- インターネットで勉強する際に、ベトナム語のサイトを利用する人が多くなっているため、さらに日本語を学習する機会が減っていると感じる。介護技術は向上するが、日本語レベルはなかなか向上しないため、試験の合格率が下がっているのではないかと考えている。職場では日本語を使用するように指導はしている。

- 職場の先輩に日本語を指導されることに対して、ストレスを感じ、配置換えを希望する人も中にはいる。
- 受講料不要で試験に向けた夜の勉強会も実施しているが、勤務時間外での対応としている。
- 国家試験の受験料の補助はしていない。
- 休みの日に講座を受講しやすいように、また試験を受験しやすいように、勤務シフトを調整するよう法人グループ本部から各施設に促している。
- 寮には、インターネットなどを完備している。自費で寮以外に住んでいる人もいるが、その場合は特に通信費の補助はない。
- e ラーニングで、日々の学習プログラムを提供し、本部の教育部門で進捗管理していることが試験の合格に大きく寄与していると思う。A1（入門編）、A2（初任者研修）～A3（実務者研修・介護福祉士）にレベルを分けて実施している。
- e ラーニングでは、インプットのみではなく、書かせたり、発音させたりするなどのアウトプットも行うことで学習した内容の定着を図っている。
- 「ケガの報告」は、より実践的な内容を学習したいとの現場からの声があったため、発音しての回答実演をプログラムに採用した。
- 文字だけでは分かりづらい箇所について図示した補助教材、音声解説を活用している。
- 法人グループ主催で有料の国家試験対策講座を実施している。通常、15 回の講義で 15 万 5 千円であるが、法人グループの職員の場合は 5 万円としている。
- 日本語試験の受験料に関しては、2 回分までを法人グループが負担している。

3．支援内容の検討プロセスについて

- 法人グループ本部担当部署が主体となり、一般的な介護スクールと意見交換などして支援内容を検討している。日本人の多いクラスに外国人が入ると教えにくいとか、外国人に特化したクラスだと教えやすいかなど。
- 過去の受験生の声も参考としている。例えば、苦手とする分野（社会や法律など）をヒアリングし、より理解しやすい教え方を工夫するようにしている。

4．不合格者への支援について

- 現場では、次の試験に向けて前向きに勉強を継続できるように声がけをしたりしている。グループ LINE で支援することもある。
- 不合格になると、ビザが切れることに対する焦りから相談が来ることがあるため、外部団体と連携しサポートしている（教育部門に相談窓口有り）。
- 不合格者の 2 年目以降の対策講座の受講料は無料にしている。

5．国家試験を受験する外国人介護人材について教えてください。

- 母国で日本の介護福祉士資格をとることの必要性やメリット（在留資格、待遇、昇格など）を学習しているため、多くの外国人が試験に臨んでいる。
- ミャンマー出身者は、家族を日本に連れてきたいという人は多い。
- 資格手当は、1.5 万円／月であり、日本人も外国人も同じ。

- 試験に合格した人には、リーダーになってほしいが、リーダーになりたいと望んでいる人は多くはない。日本人に対する遠慮もあるのかもしれない。
- 定期的な面談の際に、リーダーになってもらいたい人（何か依頼した際に期待した以上の仕事が返ってくるような人など）にはその旨を伝えている。
- 試験に合格し、家族を日本に呼んで働いている人は、以前よりも自信をもって仕事をしているように感じる。

６．学習支援における課題について

- 一部はダラダラと受験するなどメンタル面での課題が見られる。本気度が足りないと感じている。
- 利用者の状況をアセスメントして介護計画を組み立てる実演に大きな課題があるように感じる。教えられたことはできるが、自ら考えて回答するような場面に課題があると思われる。「なぜ、この方法が良いのか」と理由を尋ねると「日本人がそうしているから」と回答する実習生が多い。
- 日本語で指導するように徹底するようにしているが、すぐにジェスチャーに頼ってしまい、日本語を使うことをあきらめてしまうような場面も増えているように感じる。

７．その他、外国人介護人材の国家試験のための学習支援について

- 日本の介護福祉士を受験するにあたって、高齢施設以外の福祉施設（児童施設など）で働くイメージも伝えられるようにしたい。外部や地域の方の声に接する機会を増やすなどもしたい。
- 日本人の仕事に対する考え方をもっと学習してほしいと思う。結婚などで 2 か月間の長期休暇をとって帰国してしまうこと、仕事が途中でも定時ですぐ帰ることなどは、最初は許容されていたが、日本人と外国人が同じ割合になってくると、外国人に対する特別扱いについて、日本人側の理解が得られにくくなっているように感じる。

外国人介護人材 B（事業者 B の施設に所属）【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 5 日（木）】

1．介護福祉士国家試験のための学習に関することについて

- 教材としては「介護福祉士国試ナビ」が一番役に立った。最初からナビで勉強すると少し難しすぎるため、基本的な内容を勉強したあとの復習や深掘りとして利用する方が良いかもしれない。
- 法人グループの e ラーニングやインターネットでも勉強した。分からない日本語や漢字は、日本語で調べるようにしている。その方が意味やニュアンスをより正しく理解できる。
- 法人グループの国家試験対策コースにも参加した。法人グループ以外のベトナム人が参加するオンライングループでも学習している。法人グループの先生が夜に個別に教えてくれることもあった。
- 過去問や模擬試験で勉強した。YouTube も昔は利用していた。
- 寮の友達と一緒に、学習の計画や目標を立てて勉強した。自分にとっては一人で学習するより、誰かと一緒に勉強するほうが向いていると感じる。
- 日本語能力試験も受験している。現在 N２であり、N１もとれるように流暢な日常会話を心掛けたい。

2．受入法人・施設からの支援について

- 講座のスケジュールと施設で働く際のシフトを調整してもらえるのは助かった。また、仕事後に時間に都合がつく場合に、個別指導もしてくれた。
- 介護福祉士の施設の先輩も熱心に教えてくれた。

3．介護福祉士国家試験の受験に関することについて

- 季節ごとのイベントがあるなど、日本の文化が好きなので、日本に長くいるために受験したいと思った。また、母国の祖母が認知症であることも、介護を勉強したい理由のひとつ。
- 現在、日本で家族と一緒に住んでいるが、この後 10 年程度は日本に住みたいと考えている。
- 国家試験に合格することは、最初は難しいと感じたが、職場の応援もあったため、頑張って勉強を頑張ることができ、1 回で合格できた。
- ベトナムにいるときから試験勉強はしていた。日本にきて 3 年以内に介護福祉士を取ることを目指してきた。ベトナムの日本語学校で日本語を勉強する際に、介護福祉士について説明された。
- 試験に合格して、職場の人など周りの人から認められた感じがしてうれしいと思う。

4．目標としている日本語能力のレベルについて教えてください。

- 日常のコミュニケーションを円滑に行うため、また利用者との会話や電話対応をスムーズにできるようになりたいため、3 年後に N１をとりたいと考えている。
- 日本語の意味が理解できず質問に対する回答に困る場面があるため、聞く能力をさらに伸ばしたい。
- 漢字の学習は難しい。

５．今後の仕事への希望について教えてください。

- 現在フロアリーダーであるが、特にリーダーになりたいとは思っていない。介護の仕事は続けたい。今はまず日本語の向上が優先と考えている。
- ベトナムでは認知症に関する知識が定着していないと思われる、日本にいるうちにもっと認知症の勉強をしたいと考えている。

事業者 C 【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 17 日（火）】

基本情報（2026 年 1 月 1 日現在）

サービス種別	指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
所在地域	近畿地方
従業員数・職員数	79 人（正規・非正規を含む常勤換算数。職種を問わず）
うち外国人職員数	29 人 （特定活動 6 人、介護 16 人、留学 1 人、特定技能 5 人、その他 1 人）
利用者定員数	80 人

1．外国人介護人材の受入れ状況、介護福祉士国家試験の受験及び合否の状況について

- 外国人介護人材の受入は平成 22～23 年ごろに EPA 介護福祉士候補者を 2 名、当法人の兵庫県にある施設で受け入れたのが法人として初めてであった。その後、平成 27～28 年ごろにも受け入れを実施した。
- 外国人介護人材の採用は各施設で実施している。

2．外国人介護人材への国家試験のための学習支援の内容・体制・方針について

- 平成 28 年頃、法人内にグローバル戦略推進委員会を設置（委員は法人内各施設から参加）した。
- グローバル戦略推進委員会では、各施設の外国人介護人材の雇用状況や制度について共有し、法人全体での取組や制度化が必要なこと等について検討をしている。
- 各施設、あるいはエリアに一人ずつ外国人支援担当者を配置している。学習支援だけでなく、引っ越しの際の手続きや銀行口座の開設、病気になったらどうするか、近隣とのトラブル解消（ゴミや騒音等）など、生活上の支援をしている。安定して学習や仕事を進めていくにはそうした生活支援も不可欠である。
- EPA 介護福祉士候補者は週に 4 時間の学習機会を設定している。4 時間のうち、2 時間は外部のオンライン研修を受講、2 時間は自己学習時間としている。オンライン研修の内容は初めのうちは日本語の学習を中心に、徐々に介護福祉士国家試験の内容にシフトする。自己学習時間では支援担当者も同席し、支援担当者から課題の提示やオンライン学習の宿題を支援している。
- 支援担当者は必ずしも介護福祉士の知識を持っているわけではないが日本語の部分に関するフォローはできている。
- 国家試験半年前から学習時間を増やし、試験 2 か月前からは勤務を週 1～2 日程度とし、残りは自己学習の時間としている。
- 外部のオンライン研修もここ数年利用している。研修の内容について、継続とするのか業者を変えるのか、といった検討はグローバル戦略推進委員会で実施している。
- 取り組み当初は各施設で学習担当者を決めて学習をさせようとしていたが、現場の仕事と並行することに限界を感じ、現在の形となった。
- 勤務時間内の学習時間を設けることについては、事前に他の職員にも丁寧に説明し理解を得られているので問題になったことはない。
- 外国人介護人材の国家試験対策で人手が不足した場合には、スポットワーカーの活用や、当該期間に長期休暇の取得時期の変更をしてもらうといった協力を得る等してカバーしている。

- 日本人職員は国も文化も違うのに一緒に働けるのか、という不安が多かった。現場でハレーションが起きないよう事前に繰り返し話合いを行い、日本人職員の不安解消に努めた。
- EPA 介護福祉士候補者には学習支援ができているが、他の外国人介護人材にそこまでの支援は現状出来ていない。EPA 介護福祉士候補者向けの資料を提供する等により、自己学習を頑張ってもらっているのが現状である。
- 個人によって教材の合う・合わないはあるので、過去問や問題集を個別に提供している。それらの費用は施設で負担している。
- 在留資格「特定技能」については大阪府から補助金が出るので、それを活用し外部機関のオンライン研修への参加や模擬試験の受験をしてもらった（ただし、現時点では 1 施設 1 回しか申請できない）。
- それぞれの国に応じた国家試験対策セミナー等（有料）の情報提供はしている。
- 大体の職員が、自分の母国語で実施されている試験対策セミナー等を受講している様子（施設として詳細把握しているわけではない）。

３．支援内容の検討プロセスについて

上記 2 に記載の通り。

４．不合格者への支援について教えてください。

- 過去に EPA 介護福祉士候補者が 3 名不合格になっており、うち 2 名は帰国した。残りの一名は再受験して合格した。
- 不合格者に対しては、支援担当者から「ここまで頑張ったのだから・・・」とフォローしたが、1 名は合格までのハードルの高さを感じて帰国してしまった。もう一名も夏頃までは頑張っていたが、点数が上がる見込みを見出せないと諦めてしまった。
- 再受験し合格した外国人はモチベーションが高かった。施設としては同じように支援していたつもりだが、合格へのイメージが持てていたようであった。また、出身国は不合格者と一緒だったが、異なる宗教を信仰していた。
- 再受験し合格した人材と夏頃まで頑張っていた人材は比較的ポジティブで日本語能力も高く、日本人職員とのコミュニケーションも積極的であった。もう一名はどちらかというと引っ込み思案であまりコミュニケーションはあまり取れていないようだったが、日本語能力が必ずしも低いわけではなかった。
- 仕事への意欲に関しても、一名は、まじめであり日本で働き続けたいと考えていた様子である。もう一名も休暇で日本国内の旅行に出かける等、日本での生活を楽しんでいた様子であり、すぐに母国に帰りたいといった感じではなかった。仕事だけでなく、プライベートの面でも日本に長くいたいと思っていたのではないか。
- 外国人介護人材は日本語の勉強をして文化環境の違う所に行くということで覚悟を持って来日している。それでもくじけてしまうということは、それだけ厳しいのだと思う。言語の壁が一番大きいのではないか。日本語は難しいとよく言われる。手厚く日本語のサポートができるようなかたち、我々は外国人介護人材を支援職として配置しているが、会話さえできれば許容するなど日本語のハードルを下げることも考えられる。書くことは出来なくても話し言葉で記録できるシステム等も開発されており、こうしたものを活用することも考えられるが、導入にはコストがかかるので施設としては難しさを感じる。

５．国家試験を受験する外国人介護人材について教えてください。

- 受験理由としては経済的な要因が一番大きい。当施設では資格手当として 5,000 円/月を設定している。また、介護福祉士を取得しているか否かで給与体系も異なるので、それもモチベーションになっていると感じる。
- その他に日本を選ぶ理由としては、日本は安全といったイメージや日本文化に興味があったという話を聞く。
- EPA 介護福祉士候補者の場合は他の職種に比べて介護はハードルが低いと感じて選ばれている印象もある。
- 法人として統計は取っていないが、外国人介護人材の半数以上は母国で看護師かそれに付随する資格を持っている。ベトナムは看護の人が多く、フィリピンは大卒（4 年制）や一般企業で働いていた人が多い印象がある。

６．学習支援における課題について教えてください。

- コロナ以降は対面からではなくオンライン研修が中心となった。そのため、対面研修のメリットが享受出来ていない。オンライン受講だと、集中できなかったり分からない所をそのままにしてしまって学習が遅れてしまったりということがある。自発的にアクションを起こせる人ならオンラインでも問題ないが、そうでない人もいる。支援担当者がずっとそばにいるわけではないので分からないところに気付けないこともある。
- また、コロナの影響で法人内の外国人職員同士で集まることもできないため、各施設に講師を派遣することも考えられるが、それもコストがかかるので難しい。
- 支援担当者は施設によっては介護担当者ではない場合もあり、担当者でも同じスキルを持っていない。そこを揃えることも難しいと感じている。
- フィリピン出身者であれば英語でのコミュニケーションもできるが、それ以外の出身国だと日本語だけのコミュニケーションになってしまうので難しさを感じることがある。

７．その他、外国人介護人材の国家試験のための学習支援についてご意見等あれば教えてください。

- 介護分野は人材不足であり、法人内でも最初の外国人受け入れは転機になった。受入の導入部分での支援は各事業所の責務だと思うが日本語理解の難しさなどは人を置けば何とかなるものではない。サポート側の人材の資質を上げることや、機器の導入で日本語は喋れなくても仕事ができるようにできれば、と考えてはいるものの、コストはかかる。
- 一法人で何かをするのは限度があるので市町村・県レベルで安価で日本語の支援や情報提供を受けられるような窓口や全体的な支援体制があれば、もう少し施設としての負担も軽減されるのではないか。

外国人介護人材 C（事業者 C の施設に所属）　【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 17 日（火）】

1．国家試験のための学習に関することについて

- 最初は EPA のテキストを使用して自分で勉強した、分からないことは施設の担当者に聞いた。
- JICWELS のテキスト以外には介護福祉士国試ナビ、過去問、模試等を使った。
- 先輩からお勧めされた介護福祉士過去問 2027 というアプリもよく使った。
- 国家試験は 80%が過去問から出るから過去問をいっぱいやると良いとアドバイスをもらった。
- 同じ母国の人同士で他の施設の人や国家試験に合格した先輩も含めて一週間に 3 回くらい（20～22 時半まで）インドネシア語で勉強をしていた。勉強の方法等もそこで共有していた。メンバーはもともとの知り合い同士でこれからは教える立場として参加する。いまは先輩たちと今後の勉強会の検討を進めている。おすすめの教材等を考えている。
- YouTube はインドネシア語で説明してもらわないと理解できないのであまり見なかった。
- インドネシアで看護師の勉強をしており、生理学や病理学など共通の部分は分かるが、理解できないことも多かった。
- EPA の研修を 2 回受け、国家試験の問題を実際に解いて苦手なポイントを教えてもらった。
- EPA は教材をたくさんもらうので逆に大変だった。自分でまとめのノート（単語集的なもの）を日本語（漢字と読みを併記したもの）で作った。
- 1 年目は点数が低く、2 年目からまとめを作ったほうがよいと自分で気づいて作り始めた。
- 勉強はもともと嫌いではない。
- 日本語は毎日勉強していて、N1 に合格したいと思っているがまだ自信はない。
- 勉強を教えてくれる先生はゆっくりしゃべってくれるが、仕事の時はみんな早口になるので難しい。分からない言葉は隙間時間にスマホで調べている。
- 国家試験は専門用語が多く、日常で使う言葉と違うので難しかった。今年からパート合格が始まるので楽になるのではないか。

2．受入法人・施設からの支援について

- 施設では 1～2 年目は勤務中に週 4 時間程度勉強した。2 時間はオンライン研修を受け、2 時間は自習で担当者に色々聞くことができた。3 年目からは試験が近いので勉強時間が増えた。
- 上記以外に 1 年目は仕事の後に 1 時間くらい勉強していた。休みの日はもう少し勉強していた。
- 国試前の 12 月～1 月は勉強中心で、勤務にはあまり入らなかった。
- 施設からは先生が教えてくれる機会の提供や参考書をいっぱいもらった。
- オンライン研修は Zoom ではなく対面だと良かった。対面だったらもっと質問とかしやすかったと思う。
- 自分で調べても分からないことや仕事で分からないことはインドネシア人の先輩に聞いている。その人が一番聞きやすい。その先輩が休暇のときには日本人の職員にも聞いている。みんな優しいので相談しやすい。
- 周りの職員からも沢山の励ましをもらった。
- EPA の勉強会に 2 日間勤務中に参加し、費用は施設で負担してもらった。
- 担当者に生活の支援もしてもらった。

・　施設から研修やセミナーの紹介は特になかった。友達から情報を教えてもらうことはあったが、施設からも教えてもらえると良かった。

３．介護福祉士国家試験の受験に関することについて

・　国家試験の合格は難しいと思っていたが、入浴介助や認知症の理解のためにも勉強した。 ・　一発合格は難しいと思っていたが、先生から大丈夫と言われ奮起した。 ・　日本は安心して生活できるので、今は日本でずっと働きたいと思っている。

４．目標としている日本語能力のレベルについて教えてください。

・　今は N2 を持っており、今年か来年に N1 を取りたいと考えている。 ・　ショートステイの利用者は比較的コミュニケーションが取れる人が多い。今はショートステイで働いているので、これを機に日本語能力を高めたい。 ・　最初のうちは方言が良く分からなかった。今は先輩が教えてくれるので問題ない。

５．今後の仕事への希望について教えてください。

上記４の通り（日本語能力を高めたいとのこと）。

事業者 D 【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 26 日（木）】

基本情報（2026 年 1 月 1 日現在）

サービス種別	介護老人保健施設
所在地域	近畿地方
従業員数・職員数	110 人（正規・非正規を含む常勤換算数。職種を問わず）
うち外国人職員数	43 名（留学 24 名、介護 18 名、その他 1 名）
利用者定員数	100 人

1．外国人介護人材の受入れ状況、介護福祉士国家試験の受験及び合否の状況について

- 昨年度の国家試験合格者はいなかった。
- 2009 年にフィリピンからの EPA 介護福祉士候補者を受け入れたのが端緒である（既に帰国している）。7～8 年前から留学生を受け入れるようになった。

2．外国人介護人材への国家試験のための学習支援の内容・体制・方針について

【アルバイトの中で実践的な知識の習得の提供】

- 現場の業務を通じて介護の実践的な内容を習得してもらうという意味合い。
- 2024 年度の国家試験合格者がゼロだったため、これまでの支援の見直しが必要と考えた。そのため今年からは、基本的な介護業務に関する基礎知識は介護主任と副主任が中心となって指導している。

【試験勉強の時間確保のため、勤務時間やシフトの調整】

- 留学生は 8:45～15:30 まで学校、16:00～20:00 まで施設でアルバイトとなっている。土日は 8:30～17:30 としている。
- 授業時間に合わせて勤務時間（アルバイト時間）の調整をしている。試験前に集中して勉強するために休みたいという希望があれば、勤務・シフトを調整している。基本的には希望通りにしている。
- アルバイトは正職員と一緒に 2 名で業務を実施しているため、留学生が休暇を申し出ても業務に大きな影響はない。国家試験合格に向けた勤務調整等の支援について、正職員から不満が出たことはない。

【ほかの外国人職員と一緒に勉強する機会の提供】

- アルバイトや卒業生として当施設で働いている職員は、施設内のスペースでの合同勉強会や食事会などを通じて交流しており、施設として外国人同士がコミュニケーションを取りやすい場の提供をしている。頻度は決まっておらず参加も強制ではないが、学生たちから提案を受けたものについてはこれまでのところすべて許可している。
- 社員寮（敷地内および車で約 15 分の場所に所在、家賃負担あり）で生活していることもあり、比較的日頃からコミュニケーションは多くとれていると思うが、国が違うとコミュニケーションが少ない傾向にある。上記のような交流会に参加して知り合いになることで、アルバイト中の会話が増え、助け合える人が増えるようである。国家試験に合格しなくても離職する人が少ないのは、こうしたことも要因の一つではないかと考えている。
- 今年度は 3 人程度が合格する見込みであり、合格者には今後、業務の一部として後輩への国家試験対策の指導を 90 分程度実施してもらうことも考えている。

【学校との関係】

- 学校とは授業の成績だけでなく、勤務と授業の調整についても相談に乗っていただける関係が構築できている。

- 学校の先生と留学生は、国家試験受験後に自己採点結果を踏まえたフィードバックを実施しており、この内容を共有してもらっている。施設でもこのフィードバックを踏まえて留学生と面談を実施できており、学校と施設で指導する内容に大きな乖離が出ないよう配慮している。
- フィードバック面談は、男性同士・女性同士の組み合わせで実施している。
- 最終的な結果が出るまでに受験者のメンタルが落ちることを想定してフォローしている。
- 地理的な要因（学校への送迎が可能な範囲）から、特定の専門学校の面接会に当法人が毎年参加している。
- 基本的な介護の実践技術に関しては当施設で教えているが、理論に関する部分については学校で教えてもらっている。学校側とは密に連絡を取り合い、合格にはお互い 50%ずつ責任を持つという認識で確認し合っている。勤務態度が学校の出席率に連動することもあるので、お互いに指導内容等について連携し、意思疎通を図っている。
- 学校での補習は有料で実施されており参加率が低いと聞いている。2025 年度の試験に合格した学生たちが次の世代の合格に向けて勉強を教える際に、プリントなどの教材を学校から提供してもらえないか相談している。合格率が上がることは学校側にもメリットがあると考えているので、どこまで費用が発生するのか、発生しないのか、当施設で負担できる範囲で提供してもらえるかといった交渉をしている。それらが手に入り、2025 年度に合格した学生たちが講師役として今後の学生に教えていく、というサイクルが繰り返されていくのが、最も理想的な流れであると考えている。

【その他】

- スマホのアプリやネットを中心に勉強しているイメージがある。テキストを買って勉強しているという話はあまり聞かない。
- 生活面の支援として買い物や通院の付き添い、学校の送迎、各種手続き（自動車学校入学等）の手伝いなどを実施している。体調不良で学校を休んでいるときは、学校側から施設に連絡があるので様子を見に行くようにしている。

3．支援内容の検討プロセスについて

上記 2 に記載の通り。

4．不合格者への支援について

- 不合格だからといって離職した人はいないが、再受験する職員と諦めてしまう職員がそれぞれいる。再受験しない人でも一生懸命仕事はしてくれるので、5 年間しっかり働いて在留資格を取るという考えである。ただし、この制度は将来的になくなると考えているため、資格取得に一層重きを置く必要があると考えている。
- 再チャレンジする人は、不合格を悔しがってまた頑張るという傾向が多い。医療分野の問題で点が取れない等課題が明らかになっていると目標が立てやすい。パート合格も弾みになるのではないか。

再受験する・しない人の違いは、勉強することで模試等のテストの点が取れるようになってきた実感があるかどうかではないか。点を取れている人は合格へのイメージが持ちやすいが、そうでない人は試験自体に苦手意識を持ってしまっているように感じている。そうした人は苦手な勉強を避け、在留資格（介護）として期限の 5 年間を働ければよいと考えて、切り替えてしまっている印象がある（仕事自体は好きである）。

５．国家試験を受験する外国人介護人材について

- 母国で看護師資格を持っていた人は 5 人程度（ベトナムが多い）。正職員になって 5 年目の者もいる。
- 受験の目的は様々である。ゆくゆくは自国で介護事業をやりたい、母国で認知症の概念がないのでそれを勉強したいという者もいる。継続して日本で働き続けたいという者もいる。
- 当法人は大阪にも施設があるので、留学生の中には大阪に行きたいという者もいるが、数年働いて正社員になる頃には和歌山で働きたいと言ってくれる者もいる。募集をかけても日本人の応募はないため、ありがたいと感じている。
- 運転免許取得のために必要な手続き支援も当事業所で実施している。通所リハの事業所では、昨年から送迎時の運転も外国人職員が担当するようになった（日本人職員の付添あり）。
- 国家資格を取得した職員は資格に見合った知識を習得しているので、後進に教えることが必然的に増え、現場を牽引してくれる。将来的には副主任や中間管理職を担ってもらうことを考えている。
- 一方、不合格者はどちらかというと引っ張ってもらう側になっており、今後の制度変更（資格を持っていなければ帰国になるかもしれない）を含めてどう支援していくのがよいか検討する必要がある。
- 介護福祉士の資格手当は 25,000 円/月。

６．学習支援における課題について

- 2024 年度の不合格者への聴き取りでは、国家試験の問題文を読み解けない・理解できないといった話があった。日本語能力を強化するために、日常のやり取りでも漢字を減らさず、（日本人同士で用いるような）あえて堅い表現を使う等を徹底している。これにより読解力が伸びているように感じている（以前は平易な表現やひらがなを使う配慮をしていた）。こうした取り組みの効果として、2025 年度の受験者は 10 名中 3～4 名が合格ラインに達していると見込んでいる。
- 一方で、日本語で理解できない部分は同じ母国語の人同士で勉強することも必要と考えており、既に国家資格を取得した先輩が後輩に教えていくということも 7～8 年前から行っている。
- 2025 年度受験者との受験後面談では、医療分野の点数が取れなかったという話があった。そこの点数が取れていれば合否が変わっていた可能性もあるため、法人内の医療施設に協力を求め、看護師からの支援が得られないか検討している。

７．その他、外国人介護人材の国家試験のための学習支援について

- 留学生は勉強もしたいが働いて稼がないといけないとも考えている。補習が有料ならば、金銭的なフォローがあれば参加させやすく、合格率も上がるのではないかと考えている。留学生はお金にシビアで、勉強にお金をかけていないように感じる。
- 一定の水準をクリアした受験生には、二回目・三回目の再受験の際にテキスト代の補助が得られる等の支援があるとありがたいと考えている。

外国人介護人材 D（事業者 D の施設に所属）　【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 26 日（木）】

1．国家試験のための学習に関することについて

- 勉強はユーキャンの教材とアプリを使用している。
- ユーキャンの教材は先輩から譲ってもらったものであり、アプリでは過去問に取り組んでいる。
- 学校以外では毎日 1 時間程度勉強していた。
- 一番難しいと感じるのは日本語、特に漢字である。試験でも漢字が難しかった。

2．受入法人・施設からの支援について

- 試験のポイントのアドバイスや教材の貸し出し、受験手続きのサポートを受けた。
- 勉強のアドバイスは日本人の先輩からも受けた。
- 勉強時間を確保するために勤務調整をしてもらえたのはありがたかった。
- 心配なことがあれば管理者に LINE などで相談している。
- 一人で勉強していると分からない・解決できないこともある。試験 1～2 か月前にみんなで集まって先輩や有志の看護師から教えてもらう機会があると良い。いろいろな国の人が来ているので、必ずしも母国語にこだわらず日本語での勉強で良いと考えている。
- 学校で勉強していたとき、中国語・ベトナム語・インドネシア語での説明はあったが、バングラデシュ語はなかった。今後、バングラデシュ語でも勉強できるようになると良い。バングラデシュ語での国家試験であれば合格できると思う。
- いまは正社員（学校は卒業している）なので夜勤も多く、外国人の先輩や後輩と一緒に勉強することは職場も勤務時間も違うため難しいと感じている。

3．介護福祉士国家試験の受験に関することについて

- 以前この法人で働いていたバングラデシュ人の先輩の紹介でここに来た。もともと親族の介護をしており、日本では介護の仕事が多いと聞いたため興味を持った。
- 国家試験は日本に来てから受験しようと思った。2024 年度の受験では合格ラインを 3 点下回っており、とても残念であった。2025 年度は結果待ちである。
- 国家資格は日本で働き続けるために絶対に必要だと感じている。

4．目標としている日本語能力のレベルについて

- 今は N3 を持っており、N2・N1 の勉強もしている。N2 になれば国家試験の問題も解きやすくなると思っている。
- 利用者・家族・職員同士のコミュニケーションは困っていないものの、分からないこともあるためもっと頑張りたいと考えている。

5．今後の仕事への希望について

- 主任になって働くことはイメージできていない。

- 入浴介助など業務が大変なこともあるが、利用者と話をするのは楽しい。今は介護の仕事を長く続けたいと考えている。

６．その他

- 介護の専門学校に入る前は、兵庫にある日本語学校で 1 年半勉強した。その前にもバングラデシュで日本語を 1 年勉強していた。
- 日本語学校と介護の専門学校は別組織であった。
- 介護の専門学校に入ることは、バングラデシュにいるときから決めていた。
- 専門学校卒業後も専門学校の先生から連絡があり、過去問等をいただいている。オープンキャンパスのときやバングラデシュ人の紹介をする際にも連絡している。

事業者 E 【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 27 日（金）】

基本情報（2026 年 1 月 1 日現在）

サービス種別	指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
所在地域	関東地方
従業員数・職員数	42 人（正規・非正規を含む常勤換算数。職種を問わず）
うち外国人職員数	11 人（留学 3 人、介護 3 人、技能実習 3 人、特定技能 2 人）
利用者定員数	56 人

1．外国人介護人材の受入れ状況、介護福祉士国家試験の受験及び合否の状況について

- 2009 年から計 4 名の EPA 介護福祉士候補者を受け入れた。うちベトナム人 2 名が途中帰国し、残り 2 名が受験したが不合格で帰国した。それ以降、EPA 介護福祉士候補者はほぼ受け入れていない。
- 現在、留学生 3 名、技能実習 3 名、特定技能 2 名が在籍している。
- 今年（2025 年度）留学生 1 名と特定技能 2 名が国家試験を受験し結果待ち。
- 昨年（2024 年度）は留学生 2 名が国家試験を受験し、2 名とも合格した。
- 一昨年（2023 年度）は 1 名が国家試験に合格した。
- 2017 年以降は、技能実習生を毎年 1 名ずつ程受け入れていたが、県の留学生受入プログラムが始まってからは、その留学生の後輩たちがコンスタントに入ってくるようになった。

2．外国人介護人材への国家試験のための学習支援の内容・体制・方針について

- 2025 年度に受験した特定技能の職員 2 名は、国家試験前ぎりぎりに実務者研修を受講させ、過去問を徹底してやってもらった。
- 実務者研修は、時間が経つと忘れてしまうと考えて国家試験前ぎりぎりに受講させたが、そこまで意味はなかったとも感じている。実務者研修は日本人向けに一方的に話すため、聞き取れてもテキストが読めないとどこまで入っているかわからないためである。
- 実務者研修については、施設が各人の自宅から近いところを探して案内している。特定技能の職員は実務者研修の費用を自分で支払うため、市の補助金の活用も含めて本人と費用について相談して、希望する所に行けるよう支援している。
- 過去問は施設で費用を負担して購入している。
- 技能実習生には施設内の指導者や管理団体の訪問指導員等が中心となって指導している。
- 技能実習生には日本語を中心に、留学生は 1 年間日本語学校に通っているため過去問を徹底して国家試験対策をしている。
- 施設から、過去問をパート毎に分けた 10 問くらいの穴埋めプリントを宿題として渡し、次回勤務時に提出してもらうようにしている。国家試験受験を見据えて提出期限は一週間程度としている。○×や選択問題は、なぜその選択肢が正しいのか、なぜ間違っているのかその理由もすべて調べて日本語で文章を書かせており、これが効果的と考えている。
- 過去問の宿題を出す順番は、国家試験に倣いＡパート、Ｂパート、Ｃパート…の科目順で出している。
- 過去問を渡して本格的に勉強を始めるのは、集中させるためにも受験する年の 4～5 月くらい。

- 勤務中の学習時間は、特別設けていない。留学生は 28 時間／週しか働けないので、休日を利用したり学校で勉強したりしている。技能実習／特定技能は仕事として働いているので、日本人と同じように、各自業務後に勉強時間を作り、宿題をやっている。技能実習生は、日本語の勉強が計画に入っているので、その際一緒に勉強する等、それぞれの制度によって支援の仕方が異なる。
- 日本語能力が低い人は、日本語の強化を最優先としている。
- 過去問のチェックや採点は施設内の指導係が担当している。施設内に、大学や専門学校で教員として専門分野（介護の基本とコミュニケーション、認知症、技術面等）を教えている職員もいるため、それらの職員や主任等、施設の職員皆で教えているような状況。
- 組織として学習支援のためのチーム等は作っていないが、職員全体に「1 回目で合格させよう」という意識があるので、皆自主的に教えている状況。
- 職員や留学生の先輩達も頑張って指導してくれるので、本人達も影響されている。また留学生も前向きな子達が多く、周りも努力している姿をみて積極的に協力してくれることに繋がっている。
- 施設職員を集めた指導に関する打合せ等は特にないが、主任会議等で国家試験前にシフトの調整や休みを取りやすいよう調整し、受験者が有給を取って勉強に集中できる時間を作る等の対応はしている。またそれに対して、他の職員が不満を言うこともなく、応援して送り出しており、本人にとっても一番良いことだと感じている。
- 留学生の場合は、冬休みになると 40 時間／週働けるが、自分で働きたいときにシフトを入れるなど、シフトの調整は本人に任せている。
- 技能実習や特定技能の場合は、本人達から要望があれば国家試験前に夜勤を減らして、日勤後の夜に勉強できるようシフト調整することもある。
- 在留資格によって指導方法が異なるので、同じ国籍同士でアドバイスをし合っていることも良い点だと考える。国家試験の利用者対応の問題についても、施設の中で技術的に培えている。
- 施設としての介護内容の教え方の手順書があり、システム的に動いていると考えている。
- 在留資格によって日本語能力が異なる。技能実習は大体 N4。
- 日本語の学習について、N3、N4 の外国人介護人材については施設で教材を購入して宿題を出している。N2 になるとかなり話せるので、自主的に N1 目指す勉強をしてもらっている。N1、N2 の外国人介護人材が N3、N4 の外国人介護人材に教えるなど良い流れができている。
- オンラインでも自主的に勉強している外国人もいる。
- 今いる N4 のベトナム人は、ベトナム人の日本語の先生がベトナム語で介護の解説しているオンライン講座で勉強している。
- 監理団体が提供する日本語の学習支援もある。
- オンライン学習は施設が紹介することもあるが、留学生は学校の先生に紹介してもらうこともある。
- オンライン講座等の費用について、技能実習は日本語の支援補助金が県から出るので対象になれば利用している。その補助金で参考書やヒアリング用のカセットデッキ、イヤホン等の購入、有料のオンライン授業の一部費用に本人と相談しながら使用している。施設としては、その手続きの支援をしている。
- 施設職員による日本語の指導には限界もあるので、日本語教師を雇うことも検討している。日本語が全く話せず途中で留学を断念する外国人がいたが、国際医療福祉大学に移ってから一気にレベルが上がったので、学校によって成長の度合いが違うと考えている。
- 生活の支援について、一人で住めるようアパート（一人一室）や生活に必要最低限の食器や電化製品、家

具、自転車等も施設で用意し、家賃も負担する等お金がかからないように支援している。

- 今は家具家電付きのアパートをほぼ 1 棟借りする形で、全員が同じところに住めるようにしている。同じ国籍の先輩たちが近くにいてフォローする等安心して生活ができていると考えている。
- 留学生、技能実習生は卒業後、住居手当として家賃の半分程（約 5 万円）を施設で負担している。
- Wi-Fi は施設側で用意したが電波が悪いとクレームが来たため、個人契約のスマホ（約 3000 円／月）をデータ量無制限で自己負担してもらっている。契約時は施設側が一緒に付き添ってフォローした。
- 外国人介護人材がわからないこと等をすぐ施設長や他の職員に聞きに行けるという安心感を持っているところが、学習意欲に繋がっていると感じている。
- 日本語を話したり聞いたりはできるが、文字に起こした時に読めない、または読めるがその意味が理解できていない時に勉強が不足していると感じる。やはり介護の学習の前に日本語がしっかりできていることが大事だと思う。
- 日本語を話したり聞いたりはできるが、読めない、意味が理解できない、長文が苦手等、一人一人の特徴があるので、個別に対応しなければならないと感じている。
- N2 を持っていても、それは N2 の試験対策をした結果によるもの。介護の国家試験はまた別に専門用語がたくさん出てくるため、その単語 1 つ 1 つを理解するなど JLPT と介護の学習は切り替えて考える必要があり、また支援の方法も変える必要があると感じた。
- 介護の専門的知識は施設内に教員もいるため皆で教えられるが、日本語を教えるのはやはり専門的な人に教えてもらった方が良いと感じている。
- 特定技能の職員は、国家試験対策は過去問のプリントで勉強しているが、日本語の学習について本人任せにしていた。しかし、長文になるとわからないことが多いので、今後は日本語学習の方も気をつけてフォローしていかなければと感じている。
- 国家試験の受験料はどの在留資格も本人負担。自分で負担することによって「受からないといっけない」という気持ちがより強くなる。
- 介護福祉士の資格手当は一律 16,000 円／月。
- 国家試験合格への意欲について、当施設の外国人は皆「絶対受かる」という気持ちで勉強している。

3．支援内容の検討プロセスについて

- 過去問を徹底的にやるという方針を理事長や施設長が相談して決定し、主任級の指導者の方々が問題を選んで出している。
- 国家試験は過去の出題傾向をみないと合格は難しい。過去 3 年間の過去問までしっかりやっていれば、教科書に載っていることも多いので、一番良いテキストだと思っている。
- 様々な出版社から過去問が出ているが、日本人職員が本屋で中身を確認して購入している。
- 過去問をインターネットで検索すると、認知症の部分だけを抜粋した問題なども出てくるので、それと今の実情に合っている問題をピックアップして宿題として渡している。文章問題等も昔と今で対応が異なるものもあるので専門の教員とすり合わせをしながら留意して問題にしている。
- 外国人本人が過去問などの教材を選ぶのは難しいので、施設で支援している。専門学校に通っている留学生は学校の資料や参考書の案内等があり、アプリで過去問を解いている外国人もいるので、あまり施設側で手を出さない方が良いと考えている。

４．不合格者への支援について

- 皆メンタルは強いが、2023 年度に受験したネパールの留学生は、不合格だった時悔しくて泣いていた。職員が来年に向けた声かけをするなどフォローした。
- 在留資格「特定技能」は国家試験を受験できる回数が限られているので、しっかりフォローしなければならないと考える。

５．国家試験を受験する外国人介護人材について

- フィリピンの EPA 介護福祉士候補者で、帰国した人は、子供と日本で暮らしたいという思いがあった。
- ベトナムの EPA 介護福祉士候補者は、N3 と母国の看護師資格がないといけないので、年齢が 20～22 歳前後の人達が多い。そのため、介護福祉士の資格を取ったとしても大体が結婚適齢期になると、母国へ戻って働くという感覚の人達が多い。
- 特定技能の職員や技能実習生達は、介護福祉士の資格を取って、長く日本で生活することを目標にしている人が多い。
- 留学生は養成校を卒業したら国家資格を取るのは当たり前だと思っている。留学生プログラムに参加したから取らざるを得ないといった雰囲気。学生なので、まだ日本で結婚して住みたい等といったことまでは考えていないのではないか。
- 施設としては、日本人と変わらずキャリアアップしてもらいたい。
- 将来的には社会福祉士の資格も取って、ソーシャルワーカーとしても活躍してもらいたい。
- 外国人介護人材に対して、主任になって欲しいことや法人内の外国人介護人材の指導者になってもらいたいことは話している。
- 社会人としてのマナーや敬語も習得してもらいたい。
- ベトナムの留学生（外国人介護人材本人ヒアリング対象者）が県の制度の一環で、小学校、中学校、高校に行って介護の魅力を伝える活動をしている。

６．学習支援における課題について

- 特になし。

７．その他、外国人介護人材の国家試験のための学習支援について

- 外国人に対する模擬試験の機会が少ないと感じている。場慣れや横の繋がりを作ること、自身の弱みを科目ごとに把握し対策をとること、時間管理のためにも模擬試験をもっと受けさせたい。

外国人介護人材 E（事業者 E の施設に所属）　【ヒアリング実施日：2026 年 2 月 27 日（金）】

1．介護福祉士国家試験のための学習に関することについて

- 2025 年 1 月に介護福祉士国家試験を初めて受験し、合格した。
- 教材としては「介護福祉士国試ナビ」を主に使用した。学校から配布された中央法規のテキスト等の資料も活用した。また、「介護福祉士国家試験過去問」というアプリで過去問を解いていた。
- 施設が用意した過去問の宿題は 2，3 回くらい実施した。
- 国家試験の一週間前くらいからは集中的に、学校の授業終了後に他の外国人と 1～2 時間程勉強していたが、その前からも国家試験の準備はしていた。特に学校の定期試験の前は、夜間や休日に学校の資料や介護福祉士国試ナビを使って勉強していた。
- 日本語学校に行っている時と専門学校に行っている時とで勉強手法は変わらない。電車や歩いている時などに、スマートフォンで撮った授業の資料を見て暗記した。ベトナム人の友達とベトナム語と日本語でクイズ形式で問題を出し合った。
- 介護分野でわからないところがあった時は、日本人が「心と体の仕組み」等を解説している YouTube を見て調べた。日本語でわからないことがあった時は、「MAZii」という日本語を入力するとベトナム語にしてくれるアプリを使っていた。「MAZii」は日本に来た時から今も使っている。
- 日本語は、聞くのも読むのも得意なので、学習に難しさは感じなかった。
- ノートに書くといったことはせず、スマートフォンを見て学習することが多く、それが自分に合っていた。
- 国家試験の中では、「発達と老化の理解」が特に難しかった。

2．受入法人・施設からの支援について

- 2 年間専門学校に通いながらアルバイトをしていた。国家試験前に、勤務時間や休暇の取得などシフトの調整をしてくれたので、集中して勉強ができた。
- 休暇取得の希望を言いやすかったことが一番うれしかった。
- 日本人の職員からわからないところを教えてもらうことや、学校で教えている教員職員から授業の資料をもらう等アドバイスを受けた。
- こんな支援をしてもらえたらよかった、これから支援して欲しい、といったことは特になく、施設の支援には満足している。

3．介護福祉士国家試験の受験に関することについて

- 国家試験を受験した理由は、日本語学校卒業後、専門学校に入り、5 年間介護の仕事をするので、知識を高めなければならないと思ったため。また、せっかく専門学校に行ったので、友達と一緒に頑張ってみようと思った。施設から、専門学校を卒業したらここで働くので「勉強を頑張ってください」と言われたことも理由の一つ。
- 不合格になって、もう 1 年勉強するのは時間がもったいないので、国家試験には一度で合格してやりたいことに時間を使いたいと思った。旅行や運転免許の取得、N1 で満点を取ることやビジネス日本語試験の受験、さらに他言語の勉強など、やりたいことがあると頑張れる。
- 高校生の時から友達と日本のアニメを見ていて、日本に行きたいと思った。

- 介護の仕事は、日本語センターの職員がベトナムの家に来て、県の留学生受入プログラムについて説明してくれたことがきっかけで知った。将来、祖母や両親の世話をすることも考えて介護福祉士になりたいと思った。
- 日本語学校に通っていた時は、まだ介護福祉士に合格したいとは思っていなかった。
- N2 を取り日本語学校を卒業して、専門学校に入ってから国家試験に合格したいと思うようになった。

４．目標としている日本語能力のレベルについて

- 現在 N1 だが、今年また N1 の試験を受けて満点を取りたいと思っている。
- ビジネスの日本語試験も受けてみたい。
- 方言を聞き取れないことがあるので、動画などをみて少しずつ勉強していきたいと思っている。方言以外で日本語に困ることはない。
- 国家試験の日本語はそんなに難しくなかったので、フリガナや試験時間の延長も必要ではなかった。長文問題を読むことも大変ではなかった。
- 日本語は、アニメを見て聞きながら話すシャドーイングで勉強した。
- 専門学校で日本語の授業はなかったので、アニメを見ながら自分で勉強した。

５．今後の仕事への希望について

- 今後 5～10 年は介護の仕事を継続したい。
- 毎年留学生や実習生等が来るので、知識や経験を積んで後輩に指導できるようになりたい。自分もわからないことを施設の職員に教えてもらっていたので、アドバイスできるようになりたいと思う。
- 10 年後は、ベトナムに帰って両親の近くに住み、日本で勉強してきた知識と経験を、母国の介護の現場で生かしていきたい。
- 県の制度の一環として、小学校、中学校、高校に行き介護の魅力を伝えた。施設が推薦してくれたこともあるが、介護のことを皆に知って興味をもってもらいたいと思い引き受けた。
- 国家試験合格後は職場の皆が褒めてくれた。他の目標も達成できるよう頑張ろうと思っている。

以上